

〈論 文〉

昆虫採集の継承をめぐる試行錯誤

——日本昆虫協会の活動初期に注目して——

渡 邊 悟 史

要旨：本研究は日本昆虫協会による昆虫採集の継承をめぐる試行錯誤を検討する。日本昆虫協会は1990年代に結成され、昆虫採集の次世代への継承をミッションの大きな柱として掲げて活動した。本研究では、この団体が昆虫採集を中心とする望ましい昆虫との関わり合い方をどのように定義し、次世代へ継承させようとしたのか、そこではどのような操作が行われていたのかに注目した。日本昆虫協会のニュースレターを1991年の創刊号から1999年の41号まで総当たりした。その結果、第一に、次世代に継承させるものを作り出すために、類似性の追求と包摂性の追求と呼ぶことのできる2つの操作があったことが明らかとなった。第二に、この2つの操作を支える実践の精神化と呼べる操作も観察された。こうした操作によって、昆虫採集を自然とかかわるための手段として継承しようとする努力や、昆虫との関わり方のレパートリーを多様化しようとする努力が形成されていた。

キーワード：昆虫採集、日本昆虫協会、継承

1. 問題の所在

2022年6月24日、新潟県阿賀町で催された「ほたるみ！ー阿賀町三川蛍見学会ー」に筆者は参加した。このイベントは、地元の知人ぞ知るポイントでゲンジボタルを採集し、観察するもので、雨天にもかかわらず子ども連れの家族を中心に50名ほどの参加者があった。「ほたるみ！」は、いわゆる昆虫ツーリズム (entomotourism)⁽¹⁾ の一例であるが、主催者の狙いは地域活性化のみならず子どもたちに虫に直接触れる機会を作りたいというところにもあるとのことであった。参加者にむけて主催者が強調したのは、次のようなことである。すなわち、事前に持ってくるようアナウンスしてあった捕虫網と虫かごを使い、ホタルを好きなだけ採集してよく見ること、そして3匹までは持ち帰ってよい。このように、「ほたるみ！」では昆虫を採集することの重要性の強調と、自宅に持って帰ってよい個体数の制限が同時になされていた。個体数の制限はもちろん乱獲の防止策に他ならない。

ところで、いつの時代においても「ほたるみ！」におけるような昆虫採集の形式が、採用されるに値するオプションだと見なされていたわけではない。昆虫採集のあり方やその是非は繰り返し激しい論争的となってきたのである。時期によっては、昆虫というものはほぼ無尽蔵に増えるのだから、乱獲などそもそもあり得ないという主張が一定の勢いを持ったこともあった。一方、採集行為そのものが否定されるべきだという議論も長らく展開されてきたし、今後もされるだろう。こうした昆虫採集のあり方をめぐる論争の歴史は、広く認識されているとは言えない。この歴史を踏まえておかないと同型の論争が進展なく繰り返されることになってしまうだろう。また、日本における自然保護や環境保全の歴史の理解が単純化されてしまうおそれがある。

さて、昆虫採集論争が活発に展開された1970年代の様相の一部は、すでに渡邊 (2019) が検討しているので、本稿ではその論争から生まれた帰結のひとつを採り上げたい。日本昆虫協会である。この団体は1990年代に昆虫採集の次世代へ

の継承をミッションの大きな柱として掲げて活動した。本稿では日本昆虫協会による、昆虫採集の継承をめぐる試行錯誤を検討する。日本昆虫協会は、どのように昆虫採集を次世代に継承させようとしたのだろうか。とくに、昆虫採集を中心とする望ましい昆虫との関わり合い方を、どのようなものとして定義しようとしたのか、そこではどのような操作が行われていたのかということに注目したい。ここでいう操作とは継承させるべきものに何を含め何を含まないのかという選り分けや、継承させるべきものたちの軽重を問い、それらの優先順位を決めることを指す。昆虫採集と言っても、そのあり方は多様である。日本昆虫協会では昆虫採集をめぐる社会的情勢や自然環境の変化の中で、昆虫との関わり方をどう再構築することができるのかについてメンバー同士で真剣に議論していた。この研究では、このような議論を検討することで、昆虫採集を自然とかかわるための手段として継承しようとする努力や、昆虫との関わり方のレパートリーを多様化しようとする努力を理解したい。

なお、以下の記述と検討にあつては資料から比較的長めの引用を行う。なぜなら、昆虫愛好家の思想は日本における環境思想史や自然保護思想史において登場することは稀であるため、資料の提示自体の価値も重んじるからである。また、本稿は昆虫採集の理想のあり方を提示するものではない。

2. 研究対象：

1990年代の日本昆虫協会の概況

日本昆虫協会は1991年に結成された、主にアマチュア昆虫愛好家を中心とする団体である。毀誉褒貶にさらされながらも主に男子の間で市民権を得ていた昆虫採集⁽²⁾は、1970年代の初頭あたりから事態の大きな変容を経験する。このころから環境破壊・乱獲・生き物殺しのインモラルな趣味として自然保護団体などから激しく非難されるのが目立つようになったのである。これに対して昆虫愛好家は、昆虫採集はむしろ自然への関心を高める教育効果の大きい趣味であり、昆虫減少の原因は開発行為による生息地の破壊にある⁽³⁾と昆

虫雑誌の紙面等を用いて反論してきた。70年代からこうした反論を熱心に行ってきたメンバーが中心となって結成されたのが日本昆虫協会である。事務局を東京に置き、倫理規約委員会、教育委員会、保護委員会、研究委員会、出版委員会、広報普及委員会などを組織して活動を展開した。

日本昆虫協会の設立趣意書によれば、日本昆虫協会の目的は「昆虫愛好家の立場で、環境保全の運動に積極的に関わること」「健全な昆虫採集の普及・啓蒙をおこなうこと」「自然に興味を持たせる為に、子供たちに積極的に昆虫採集をやらせること」などとされる。そして、「全国のプロやアマチュアの昆虫研究者・昆虫愛好家・ナチュラリストを中心に、約1,300人の個人会員と20あまりの団体会員が参加しており、マスコミでも好意的に報道されております」と会の大きさが強調されている（日本昆虫協会、1991a: 1）。以下、趣意書に記載された「主張」と「活動目標」を掲げておこう。原則としてその主張内容には、70年代の昆虫愛好家のそれとの変化は認められない。下線は資料の通りである（以下同様）。

日本昆虫協会の主張

- (1) 子供には、原則として自由に採集させる。『採るな』といえは、子供は昆虫、ひいては「自然」に無関心になる。
- (2) 大人には、節度ある採集を求める（採集のモラルを作る）。
- (3) 哺乳動物や鳥類、魚類、昆虫、植物は、それぞれ個体数・移動力・繁殖力が全く違う。これらを同じものと見なして、画一的な扱い方をするのは間違いである。
- (4) 安易な採集禁止は何の保護にもならないだけでなく、保護の方策を考える手まで縛ってしまう。「自然保護」=「環境保全」でなければならぬ。
- (5) 現在民間にある多くの個人コレクションは、貴重な文化遺産と考えられる。その散逸を防ぎ、公的な保存・利用を考える。それらを恒久保管できる国立自然史博物館の建設を提案する。（日本昆虫協会、1991a: 1）

日本昆虫協会の活動目標

- (1) 会誌を発行し、昆虫の観察・採集を通じて自然保護をPRします。

子供たちが本当の意味で自然に親しみ、自然の面白さを理解するには、さわったり折ったりちぎったりつぶしたりできる自然が必要です。子供にとって、自由にいじれない自然など何の意味もなく、興味をもつことはありません。しかし、今の自然保護教育では、しばしば採集が否定されます。私たちは、基本的に自然保護に賛成するのですが、この点については納得ができません。「採るな、さわるな、摘むな」と言いながら、同時に自然に関心を持たせることなど、はたして可能でしょうか。カブトムシを捕まえたりアゲハチョウをネットに入れた時の興奮や感動を、大人の理屈で否定してしまっただけです。自然に関心を持たせる方法として、昆虫採集が極めて優れた方法のひとつだということを、私たちはもっとはっきり主張し、採集を中心にした自然観察会をどんどん行います。(日本昆虫協会, 1991 a: 1-2)

なお、ここで注意しておきたいのは、この時期に昆虫採集といったときは、採集から展翅⁽⁴⁾等を伴う標本づくりまでの一連の動作を指しているということである⁽⁵⁾。昆虫採集に標本づくりを含めるかどうかということ自体が、後に見るように論点となっていたものの、これがスタンダードな理解であるということは共有されていた。

ここで日本昆虫協会(以下、協会とも記述)の時代認識とそれにもとづく危機感を確認しておこう。協会は、昆虫採集の意義が理解されづらくなり、昆虫採集がよくないものだという考えが社会に浸透しているというメッセージをたびたび発した。事務局を務めた小岩屋による以下の言説はその典型的なものである。

私たちは「やみくもに採集復権を叫んでいる」わけではありません。勿論、昆虫採集を宿題として復活させようなどとはゆめゆめ考えておりません。私たちの本意は、「昆虫採集」に

関して言えば、その意義を正當に評価する、の一点にあります。近年、教育現場や民間における「観察至上主義」の浸透の結果、次のような憂慮すべき事態を耳にするようになりました。『夏休みの理科作品展で昆虫標本展示は行わない、との御達しがあり、虫好きの子供たちにショックをあたえた。そのために開発の著しい都市近郊の昆虫資料が集まらなくなった…』など(小岩屋, 1991: 3)

これらの認識を背景に日本昆虫協会が主に展開したのは次の3つの行動であった。第一に、昆虫採集への非難が掲載された各種媒体への抗議である。彼らが「圧力団体」(木村, 1997 a: 20)と自称する所以である。第二に、昆虫採集を行う次世代を育成することである。この目的に沿って、昆虫採集会や夏休みの自由研究賞などが行われた。本稿が主に注目するのはこの点である。第三に、昆虫愛好家のマナー向上がある。たしかに土地への侵入や不法駐車、食樹の伐採など地元住民とのトラブルを引き起こすような一部昆虫愛好家の「マナー」は大きな問題であり続けていた。これを受けて日本昆虫協会は昆虫愛好家が守るべきルールを策定することになる。

日本昆虫協会が発行するニュースレターで報告されているように、結成時には新聞報道も多数なされた。活動初期に協会は昆虫採集を非難する報道や論文への反論を熱心に展開した。この活動についてはすぐに「2年間活動してきました、『昆虫採集は自然破壊だ』という誤解はかなり払拭されてきたと感じています」という認識が表されている(小岩屋, 1991: 3)。実効性は別として協会員が遵守すべき「昆虫愛好家の行動指針」も1993年に策定された。こうして「次世代の育成」に関わって昆虫採集の継承が次なる大きな問題とあらためてみなされるようになる。「1993年度第2回役員会報告(上)」と題された対談式の記事で小岩屋は次のように述べている。

小岩屋：昆虫採集そのものの原則的な維持というか、主張や意義の宣伝は当然これからもやっていくわけですが、昆虫採集をしている大人を

擁護するのは限界がある。マナーの悪い人も実際に存在するし。ある程度こういうマナーの指針を出して、それ以上は「もう擁護できんぞ」ということにして、子供を育てるという方向にシフトしようかと考えています。若い連中を育てることとか、子供たちが採集できる雰囲気を作っていくこと。それは昆虫採集の意義や積極的な宣伝とも関わってくるわけです。毎年昆虫大賞をやって、百何十人かの応募があり、親御さんからも「採集をやるのを控えようと思っていただけども、採集することはよいことなんですね」というような感想が聞かれます。今年は賞を受賞した子供の学校に連絡したり、地方紙に連絡しました。あちこちの地方の新聞に彼らの受賞の記事が出ています。これは、彼らにとって非常に励みになると思います。(日本昆虫協会, 1993 b: 9)

当時の会長である奥本大三郎も次のように述べている。

後継者といいますが、若い人が昆虫採集の興味を持ち続けてくださるということも大事です。昆虫協会でも小さい人を中心に採集会を開いております。去年もずいぶんやっております。それが採集のきっかけ、標本づくりの手ほどきになればいいと考えております。(奥本, 1997: 8)

こういった後継者育成の必要性についての認識の大きな背景には、昆虫愛好家の高齢化もあった。会員からは以下のような指摘がなされている。全国に存在する昆虫同好会の会員が高齢化しているというものである。

昆虫同好会員の平均年齢は、「昆虫と自然」誌の1993年のデータによれば44.2才となっている。50年代初期の会員は高校生・大学生くらいの若者が主体であったから、著しい高齢化が進んだものである。今日、全国的に中学生・高校生ぐらいの昆虫愛好者はごく少ないが、小学校低学年の子どもにはまだ虫好きが多く、ま

た若い母親の中には、子供のまわりから自然が失われることに危機感をもつ人が少しずつ増えてきているようである。(高橋, 1996: 12)

このような背景に促される形で日本昆虫協会は後継者育成に活動の焦点をあわせていくことになる。ただし、たとえ「『昆虫採集は自然破壊だ』という誤解はかなり払拭されてきた」(小岩屋, 1991: 3)としても、それで昆虫採集について何の議論が必要もなくなるというわけではなかった。日本昆虫協会の中で、昆虫採集をどのように定義し、どのように意義付けするかという問題は依然として議論に値するものだったのである。

3. 研究の方法と資料

日本昆虫協会内部における議論をフォローするために、協会発行のニュースレターを主な資料として検討を進める。1991年の創刊号から1999年の41号までを総当たりした。なおニュースレターは3号までが『ニュース・レター』と題され、4号以降は『日昆協ニュースレター』と改称された。この時期に注目するのは、日本昆虫協会がマスコミを通じて公式の見解を活発に示すとともに、昆虫採集の意義について誌上で多くの意見が交わされた時期だからである。90年代のニュースレターは年に4~6回のペースで発行され、協会運営スタッフの公式見解や公式行事の報告に加えて、会員の意見や活動方針への疑義が積極的に掲載されている。そこでは散発的に、何をどのように子どもたちに受け継がせるのか、浸透させるのかという論点が繰り返しあらわれている。当然ながら会員たちは変化していく時代状況と無縁ではいられなかった。そこで、自分たちとは同じことをすることは子どもたちにはできないが、それでも何かを継承してほしいという願望を実現するために試行錯誤した。ニュースレターはその試行錯誤の記録として読むことができる。

4. 検討結果

4-1. 類似性の追求と包摂性の追求

日本昆虫協会のコアメンバーが昆虫採集を覚え、一生の趣味としていったときの環境と、90

年代の子どもたちのそれは大きく異なる。じつのところ、日本昆虫協会が昆虫採集の継承を目指したときには、すでに先行世代が行っていたような昆虫採集はもはや不可能に近いという認識は避けようのないものになっていた。とくに日本昆虫協会が拠点を置いた東京で「普通種」⁽⁶⁾とは異なる昆虫を採集しようとすれば、遠出をしなくてはならない。加えて、教育においてはすでに昆虫採集は夏休みの宿題の主役ではなくなっていた。後に見るように、むしろ昆虫採集は子どもたちの間でも非難の対象となることもあった。このような状況では、日本昆虫協会のコアメンバーが子どもの頃に行っていた昆虫採集と子どもたちがこれから行うそれは違ったものにならざるを得ないだろう。こうした状況について、事務局は次のような認識を示している。

昆虫協会の大事な仕事はまだあります。昆虫少年たちの育成です。最近の子供は、あまり生き物に興味がないと言う人もいますが、私はそうは思いません。子供たちは昔も今も生き物に興味があるのですが、回り(マ)から自然がどんどんなくなるために、どこに行ったらいいのかわからない、つまり身近な情報をなくしているのです。きのうカブトムシを採った林が、今日はなくなっている、という日々ですから、明日の場所を見つけれずにいる。そういう状態です。(日本昆虫協会・事務局, 1992 a: 3)

そこで日本昆虫協会が熱心に取り組んだのが採集会の開催であった。これは日本昆虫協会の会員がインストラクターとなり、子どもたちに昆虫を採集し、標本を作るという昆虫採集の一連の作業に必要な知識と経験を伝達しようとするものである。先も引用した通り、会長の奥本大三郎は1996年の総会で「昆虫協会でも小さい人を中心に採集会を開いております。去年もずいぶんやっております。それが採集のきっかけ、標本づくりの手ほどきになればいいと考えております」と述べ、採集会の意義を強調していた(奥本, 1997: 8)。上記の引用に続いて、総会における事務局による基調報告では次のように述べられている。

当協会の採集会・観察会には、いつも大勢の子供達が集まってきます。子も親も、昆虫採集の場所と時期に関するリアルタイムな情報を欲しがっているのです。図鑑はいくらでも買えますが、その中の虫がどこに行けば採れるのかは書いてありません。公園では「虫を採らないように」といわれます。採集地案内⁽⁷⁾は、いつも大人のものばかりです。そういう子供たちのためにもっと採集会を企画したいと考えています。(日本昆虫協会・事務局, 1992 a: 3)

また、以下に引用するコアメンバーの対談でも、採集会の課題が嘆かれつつ「後続養成」における採集会の重要性が確認されていた。とくに採集会とは「後続養成」の場であるという認識が表明されているのは注目に値する。

小岩屋：採集会の問題は、我々の側がマンネリになることですよ。

川上：指導する側がいつも同じ顔ぶれで、そこからあまり増えていかない。

梅田：参加してくる人も結構固まってきている。

葛城：「昆虫採集はこんなに楽しいものですよ」ということで、マスコミにも取り上げてもらうということが、最初の目的の一つだったのではないのでしょうか。

川上：それはそれで成功したと思います。かつて夏休み昆虫採集というのは、後続養成基地だったと思うわけです。結局それを今までは文部省がやってくれていたわけですが、いつの間にかつぶされてしまった。虫屋側として後続養成の努力を怠ったために、虫屋人口は今いびつな逆ピラミッドになってしまっている。それを改善する意味でも、後続養成に力を入れるべきではないのでしょうか。(日本昆虫協会, 1993 b: 14)

じっさいに、本稿の検討対象時期においては年に少なくとも5, 6回のペースで観察会をふくむ採集会が協会主催あるいは共催で行われていたようである。その内容は設立趣意書におけるように

「子供には、原則として自由に採集させる」というものであった。採集された昆虫は持って帰り、飼ったり、標本にしたりする。たとえば「子供たちに自由に虫と接してもらおうと、採集・観察会を行ってきました」（日本昆虫協会，1991 b: 11）として、次のような開催報告が掲載されている。

(2) 第一回オオムラサキ採集会

(韮崎市穴山，7月7日)

約40名参加。

(3) 第二回オオムラサキ採集会

(韮崎市穴山，7月14日)

約70名参加。講師／福田理事・油井幹事など。伐採により、樹液を出すクヌギが穴山でも少く(マ)になりました。それでも樹液に集まるオオムラサキの姿を観察・採集することができました。憧れのオオムラサキを採集して、その興奮で手を震わせる子供たちの姿が印象的でした。まわりの梅の畑に入らないこと、ゴミを持ち帰るように注意しました。14日は漫画家のえびすさんもリポーターとして参加し、その様子は日本テレビで報道されました。(日本昆虫協会，1991 b: 10)

参加人数にも表れているように、採集会のニーズも高かったようである。採集会で用いているパンフレットを参加できなかった人にも配布するとの知らせをニュースレターに載せたところ、たくさんの依頼があったという報告もある。その書き手は、「これは、最近中級者、上級者用の採集情報はすごく多いのですが、初心者向けのそのような情報が少ないということなのだと思います」とその背景を推測している(日本昆虫協会，1996: 5)。

このように採集会の大きな役割は、採集技術の継承と同時に採集実践を生み出すための情報やネットワークを子どもたちに提供することにあった。採集会の必要性は、マンネリ化や人手不足が嘆かれつつも、繰り返しニュースレターでは確認された。以下は日本昆虫協会における教育委員をつとめた福田晴男の弁である。

八王子で小学校の教師をしております。

特に子供を中心に採集観察会等催し物を行っています。現在計画を立てている段階です。子供たちを取りまく環境は変わってきています。昔は虫博士といわれる子供がいましたが、今は皆無です。昨年1年間やってみてようやく呼び水になったという段階です。(日本昆虫協会，1992: 10)

昆虫が好きな人達が自分たちの世界にのめり込んで内容が専門化・高度化していったことによって、虫が好きな初心者置き去りにしてきたのではないかと。自分たちが子どもの頃はおそらく近所に一緒に連れていってくれる人や標本を見せてくれる人がいたと思います。我々の世代はそれを怠ってきたのではないかと自戒の念を込めて思っています。(日本昆虫協会，1993 a: 4)

ただし、採集会はすべての会員に疑問なしで受け入れられたわけではないようである。ニュースレターには採集会への疑義が投稿されたことがあった。これはモンキアゲハをターゲットとした採集会に出くわした会員が、一つの場所で集中的に一種を狙うやり方は問題ではないかと主張したものである。

戦前、私はいわゆる昆虫少年でした。そして今は特に蝶やトンボの写真を撮ることに熱中しています。しかしどこへ行けばどんな蝶、どんなトンボに会えるか、は自分で研究せねばなりません。そのため昆虫協会などの情報も利用しているのです。先日、信州のある場所へ行きましたそこは数年前、花の撮影会で行ったところなのですが、この地形ならきっと蝶やトンボも多いだろう、と思って記憶をたどってその道を下りてゆきました。そうしたら思いもかけず、ヒョウモンチョウ、ルリタテハ、それにコムラサキにスジボソヤマキチョウまで見ることができました。こうした喜びこそが昆虫採集の楽しみではないでしょうか。協会でお膳立してもらってモンキアゲハを採集する、ということ自体

何ら教育的ではないと思います。…今回のモンキアゲハの採集会は乱獲とまではいきませんが、少なくとも一時期一地域を考えると乱獲の部類に入でしょう。ましてそこには“労せずに手に入れる”という非教育的要素が感じられます。(奥田, 1995: 3)

これに対して事務局は次のように反論している。すなわち、情報提供によって昆虫採集を始める第一歩を促そうという議論である。この反論の仕方は協会のオフィシャルな語りに即したものだと言えよう。

一度採集会に来て頂ければ分かりますが、参加者の殆どはお母さんや小さい子供たちです。30人いたとして、全員でせいぜい数匹のモンキアゲハが採れれば上出来です。大半は逃げてしまいます。それをみんなでワアワア言いながら、或いはお弁当を食べながら採れないなりに追いかけて回るのが、楽しい思い出になるのです。

また一度参加すれば「なるほど、モンキアゲハはこういう所にいるんだな」ということが分かり、次からは自分自身で探すことができるようになるでしょう。貴方は長年虫に接しておられて既に色んなことをご存知でしょうが、小さな子供や初心者のお母さん達にとっては、ごくささやかな情報を手に入れるのでさえ一体誰に聞きどこに行ったらよいのか、途方もなく大変なことなのです。昆虫協会は、虫の世界への第一歩のところをホンのちょっとだけ教えているのです。子供たちは、じきに自分でいろんな虫を見つけいろんなことを覚えていくでしょう。しかし最初の一步だけは教えてあげなければ、というのが協会の考えです。(日本昆虫協会・事務局, 1995: 4)

採集会のあり方に加えて、採集は必須なのか、さらに標本づくりまでしなくてはならないのか、という論点も存在した。つまり昆虫少年・少女を生み出すのに、そこまでする必要があるのであるのかどうかという問題は、散発的にニュースレターでも話

題になるところであった。たとえば次のような提言は、採集や標本づくりの継承が目的化してはいないかという疑問を呈している。

なぜ、昆虫協会が発足したかといういきさつを考えれば、今の論調はやむを得ないものかとは思いますが、私は「昆虫採集の勧め」よりも、昆虫そのものへの関心を高めること、そしてそもそも昆虫の存在を認めるという気風を高める運動に力をいれてくれることに期待しておりました。「採集」については、私は採集第一主義には反対で、採集から標本作成が目的、またそれで完結ではなく、採集や標本づくりは昆虫研究の始まりであるし、方法の一手段であると考えます。自然の中での昆虫の存在を理解するのが本来の目的と考え、標本作成は、そのための手段の一つとして位置付け、採集を目的のみに留めてほしくないと考えます。それは当然の「常識」であると思っておりましたが、そうでもないようなので敢えて発言します。(河合, 1992: 6)

そのうえでこの人物は「逆説的採集否定論」を提言し、次のように述べる。「採集をしたがらない者に、採集を強制するな（理解できないものに拒否反応を誘発する恐れあり）。詳しい事例説明が必要ですが、昆虫の仲間作りを焦るなということですよ」(河合, 1992: 7)。

同様に、採集や標本づくりのみでない昆虫とのかかわり方を考慮することを求める投稿は他にもあった。たとえば、標本づくりを強制されるのも嫌だし、採集を止めさせる人も大嫌いだというもの(氷室, 1992: 10)や、相手が昆虫のことをどの程度知っているかによって話す内容を変えるべきだという主張である。後者を引用しよう。

自然に十分に興味もあり探求心も科学心もある学生たちや一般を対象にした観察会では、「つかまえるなんてカワイソウ」なんていうセンチメンタリズムで採集（および標本作製）を否定するのは間違いでしょう。

「一方でまだ昆虫との関わりが深くない」「知

る」段階の参加者たちには、やはり正しい知識とより深い理解を提供するべきです。

自分の観察会に参加してくれるものが、自然とつきあうどの段階に属しているのかの判断は難しく、またその要求に応えるのは大変難しいものです。これからも（これから？）「昆虫採集是非論」なんていう小さいことでなく、もっと大多数の「自然に全く関心のない相手」を問題にとらえて、人とも自然ともつきあいを深めていきたいと考えています。（金田，1994: 4）。

さらに具体的に、採集から標本づくりばかりではなく、写真をもっと積極的に活用すべきではないかという提案も見られた。協会設立当初からの会員だという人物は、自然との距離を縮める手段として昆虫採集を推奨することは、多くの人々に対して逆効果なのではないかと主張する。そして『『日本昆虫協会』を大きくし、多くの人たちに理解してもらうためには別のアプローチが必要だと思えます』としたうえで、一眼レフカメラが普及してきた今こそ読者投稿型の写真集を企画すべきだと述べる（三好，1994: 3）。

採集はともかく標本づくりは受け入れがたいが、昆虫との関わりは持ちたいと考える人々へ対処する必要をコアメンバーも感じていた。以下の対談はその認識を示している。ここで言われるアサギマダラのマーキングとは、列島を縦断して移動する蝶であるアサギマダラの翅にペンでマーキングし、移動ルートを解明しようとする調査である。つまり採集はしても殺さずリリースするというイベントである。

柴田：アサギマダラのマーキングは「こういうことを協会でもやってますよ」という意味始めたわけですよ（マ）。

油井：もっと簡単に言うと、虫を殺せない人もいるわけですよ。そういう人にとってはマーキングはおもしろいことです。殺さなくてもいい方法があるということが分かることだけでいいわけです。協会は種をまくだけでいいんですよ。

川上：ある程度やりっぱなしでよいわけですよ。

松香：協会として観察会・採集会をやってきたわけですね。「採集しなくても楽しむ方法があるよ」というのがアサギマダラのマーキングだと僕は解釈しています。（日本昆虫協会，1993 b: 14）

この文脈でもうひとつ注目すべきは、日本昆虫協会が毎年催した夏休み昆虫大賞である。その理念について、採集会とあわせて次のように事務局は語っている。夏休み昆虫大賞もまた昆虫少年・少女という後続養成のためのものであった。

最後に、昆虫少年・少女を育てよう！

2回の夏休み昆虫大賞を通して、多くのすぐれた作品が生まれました。また採集会を通じて、多くの昆虫少年・少女に会うことができました。採集は、たいいてい子どもたちにとっても楽しい遊びです。大人の理屈で子どもの楽しみを奪うのは、子どもの権利の侵害です。虫採りは、子どもたちの基本的人権第1条です。微力ながら昆虫協会は、子どもたちの権利を擁護し続けます！また少数派である大人の昆虫愛好家の権利も擁護します。（大人のマナーがもっとよくなるといいな）。（日本昆虫協会・事務局，1992 b: 12）

ここでも採集が強調されているが、同時に興味深いのは、標本づくりや研究レポートのみならず、絵や小説、詩などが選考の対象となっているということである。たとえば、1993年の募集要項を見てみよう。

日本昆虫協会では、昆虫を通して自然に親しみ、また、次代の昆虫愛好家・昆虫研究者を育成するために、小中学生を対象にした「夏休み昆虫研究大賞」を設けています。昨年は100点近い優秀な作品の応募があり…美術や文学作品では、芸術的に価値の高い作品が目白押し、審査員からは賞の数を増やせないものかという声相次ぎました。…昆虫に関するものなら、

テーマ・内容は自由。

(中略)

内容：

①昆虫に関する研究論文

②昆虫の標本

標本のみ応募は小学生までとし、中学生の部では採集や標本制作などを元に研究調査の論文やレポートの添付が必要です。

③昆虫をテーマにした文学作品

ルポタージュ・小説・エッセイ・詩・短歌・俳句・など

④昆虫をテーマにした美術作品

絵画・彫刻・版画・など

⑤昆虫をテーマにした写真

⑥昆虫をテーマにした映像音響作品

(日本昆虫協会・事務局, 1993: 15)

じっさいに選評においても美術作品や小説は、研究レポートや標本と同列に扱われ、熱心に講評がなされた。このように日本昆虫協会は、昆虫採集以外の昆虫との関わり方も次世代に広めていくべき実践の中に含めていた。

本節の検討によって次の事が言えよう。まず、子どもたちに昆虫採集を行ってほしいということから、積極的に情報やネットワークの提供がなされる。これは、それまで行われなかったこと、すなわち違いを補助的に導入しながら、採集と標本づくりという前の世代が行っていたことと同一とされる実践を作り出していこうとする操作である。類似性の追求である。一方、夏休みの宿題大賞においては、昆虫をめぐる実践を幅広く射程に収めようとされている。ここで追求されているのは、昆虫採集以外の実践という違いも継承の対象としていく包摂性である。同一のものの中に違いを取り込んで同一のものの自体の範囲を広げていこうとするものである。平たく言えば「ストライクゾーン」を広げようとする試みであると言えよう。もっとも包摂性の追求は危うさをも秘める。なぜなら採集でなくてもよい、標本を作らなくてもよいとしていくなれば、日本昆虫協会の存在意義と矛盾しかねない。次節ではこの点がどのように解決されようとしていたのかも見ていくことに

しよう。

4-2. 実践の精神化

日本昆虫協会による昆虫採集の継承を考えるとときに重要なのは、協会立ち上げのきっかけである。先述の通り、それは昆虫採集の批判への対抗という点が大きかった。つまり、日本昆虫協会が昆虫採集の継承を進めようとするれば、「外部」にも、ときに「内部」にさえもなぜそれが重要なかをつねに説明する必要があったということでもある。むろん、このことは日本昆虫協会のメンバーにとって強く意識されていた。「外部」にむけた意識の強さは、そもそもこの団体が「圧力団体」と会員によって呼ばれることもある点にも表れている。

昆虫採集の擁護のために日本昆虫協会のメンバーがしばしば用いた主張は、昆虫採集を通じて特定の精神や感情生活が育まれるということであった。本稿の関心照らして注目すべきは、子どもたちへの継承にさいして、精神の継承こそが目標とされたことがしばしばだったという点である。すなわち、実践の継承というのは精神の継承に他ならないという議論が登場した。これによって昆虫採集がたんに外形的に継承されればよいのではなく、精神こそが重要だとされる。

具体的に見てみよう。以下は当時の会長である奥本大三郎によるものである。

やはり子供などを連れて昆虫採集に行きますと、例えば小学生にクヌギの木があってカブトやクワガタが付いているのを見せますと、喉から絞り出すような声で「ほし〜い」と言うんですね(笑)。あの「ほし〜い」というのは…。またオニヤンマなんか飛んでくると、目の色が全く変わってきます。

ああいう口から心臓が飛び出すような興奮というのは、われわれもそれを感じて虫好きになったわけですから、あれをやはり小さいときに感じた人をこれからもっと増やしていきたい。それがやはりわれわれの使命ではないかと思えます。そうしないと虫離れといいますか、虫に全く縁のない人、そばに何かが飛んでくると

「キヤーキヤー」騒ぐ人がどんどんどんどん増えていくと思います。(日本昆虫協会, 1995: 3-4)

奥本: 我々としては超マイノリティーになってしまったのでは、困りますので、やはり小さい世代の子どもたちに虫採りの楽しさという一番始め(マ)の情熱みたいなものをまず味わってもらおうところからスタートしていけば良いと思います。そうでないとうほとんど言葉が通じなくなるのではないかと思います。虫のことをいろいろ強調しても。今ここだけで特殊な言語を手話のように流行らせているのかもしれませんが。それをもう少しいろんな人に理解してもらうには、子供時の小学校4年生以下くらいの子供達に虫採りの楽しさを知ってもらう必要があるのではないかと思います。(日本昆虫協会, 1997: 12)

このように子どもたちに自分たちと同じようなものとされる感情生活を確保するというのが目標に据えられた。昆虫採集はこういった感情生活を子どもたちにもたらし、やがて生き物の生と死を真剣にとらえる精神を育むものとされた。もちろんその精神を醸成するのは採集会などの場であるとされる。

精神を強調することは、前節で引用した「採集から標本作成が目的」となって、活動が「またそれで完結」してしまっているのではないかと、といった投稿(河合, 1992: 6)が懸念していたようなことを避けるためにも有効であった。なぜなら目的は精神の育成なのだから、昆虫採集自体が自己目的化しているわけではないという議論があらかじめできるからである。一方で、精神を強調することは、また別の危うさをはらむことになる。なぜならば、この論理を突き詰めると、精神さえ継承されるのであれば、実践の形式は何でもよいということになりかねないからである。そのばあい、無限に実践の形式は考えられ、昆虫採集でなくてもよいということになる。そうなれば日本昆虫協会の存在意義も脅かされるだろう。この問題への対応は、昆虫採集の重要性や他の実践に対す

る優位性を、精神への効果の観点から強調することとなされることになる。これは事務局の次のような記述に見ることができる。

カブトムシやザリガニを観れば、採ろうとするのが最も原初的な子供の本性でしょう。採って帰れば、いずれ虫かごやバケツの中でそれらは死んでしまいます。子供たちは、「採りたい」という激しい欲望に突き動かされ、ドキドキし、逃がした悔しさに呆然とします。他の子に先に採られた時の嫉妬や悔しさ、せっかく帰って帰った虫たちが死んでしまった時の「かわいそう」という後悔の気持ち、……こういった一つ一つの違った感情の積み重ねが、子どもの感性を作り上げていくのだと、私たちは考えています。「採集しないで観察しよう」というのは、すでにいろんなことを経験してしまった人の「大人の論理」という気がします。本当に観察するだけで子供たちは満足しているのでしょうか。我慢しているだけではないのでしょうか。「アリにしてもハチにしても採集にこだわらない方が、興味深いさまざまな観察をすることが可能なのである」という論理は、ある程度採集の経験を積んで心のゆとりのできた人にして、はじめて可能なのではないのでしょうか。(小岩屋, 1991: 5)

ここでは精神の継承という観点における昆虫採集の優位性が、採集なしに観察するという他の実践と比較しながら強調される。この記述が反論しようとしている「採集しないで観察しよう」という立場は、想定ではなく、かなり具体的な存在として意識されていることに注意しよう。すなわち、「採集しない観察会」という運動の存在である。これは1970年代初頭に提唱され、その理念は日本自然保護協会の『自然観察ハンドブック』にも組み込まれたものである。そこでは、自然観察会が「多くの場合、珍稀種を探し求めた採集に走るなど、自然破壊を起こすような形で行われながら、更に、それを必要悪として是認する風潮が目立ち始めて」(日本自然保護協会編, 2002: 199) いるという認識に基づき、「採らないで観察

することが、生き物の生き生きとした生活をみるにはいちばんよい方法なのだ」とされていた（日本自然保護協会編，2006: 309；渡邊，2019: 174）。こういった議論への反論のために動員されたのが上記の小岩屋が述べている「原初的な子供の本性」といった本質主義的な言説だったのである。

精神の強調は、コアメンバーの議論のみならず会員からの声にも表現されていた。いくつか掲げてみよう。

「カブトムシを捕まえるのはかわいそう」という単純な感情論はともかく、カブトムシと無心に遊ぶ子どもに脚が折れたり死んでしまうから飼うなとか、殺して標本を作るのは残酷だ、とかいう理由でカブトムシを捕まえることが非難されるのが現状である。「生き物」であるカブトムシを野外で見つけて感激し、自分で動く姿を見て捕まえて、その力強さや勇姿に感動する機会を持つことがいかに大切か。体の仕組みや野外（いわゆる自然）での生活を観察して生態を知ることがいかに大切か。カブトムシと遊び、大事に飼っていたムシが死んでしまったときの悲しみの体験により、体で「生き物」を感じている子どもたちには、生き物に対する愛着が芽生え、生き物を具体的に知るだけでなく、死についても真剣に考える子どもになっていく。むやみにムシを殺すことはなくなる。（田中，1994: 9）

最近になって「昆虫採集」は「生命の尊重」や「自然保護」と矛盾すると言われています。以前に添削論文で、「自然が好きで昆虫採集をよくやっていた」という部分を、言っていることが矛盾していると、指摘されたことがあります。私はそれを見た時、すごくショックでした。私が今まで無心に、楽しく自然の中で遊んでいた行為が、多くの小さな生命を奪ってきたのだという残酷な行為だと責められたような気がしたからです。このことで、思い悩んでいた私を慰めてくれたのが父でした。父は「昆虫採集」をすることが必ずしも「自然破壊」になる

とは限らないのではないかと、よく考えてもらって、言ってくれました。

それから、時々ふと思い出しては、この話題について話し合いました。その結論としてやはり「昆虫採集」は「自然破壊」にはならないという考えに賛成です。ただ、むやみに虫を殺してしまうことは、確かに自然破壊につながるだろうけど、飼育したり、観察したりした上で標本にすることは、その昆虫の生態を詳しく知り、それを後世へと伝えることができます。そのおかげで、自然を身近に感じることができると思うのです。それが尊い生命を奪った行為に代わる、昆虫たちへの大きな恩返しになると思います。（田中，1992: 2）

ところが、日本昆虫協会の強調する精神のあり方は、ときに挑戦を受けることになる。これを表す例が、とある小学生の経験を訴えた母親からの投稿を端緒とする反応の連鎖だった。小学2年生の息子が夏休みに作った標本を学校に持っていったところ、同級生にからかわれてひどく傷ついたというものである。

この夏休みはかっていたカブトムシが死んだのをきっかけに標本をつくりました。カブトのオス、メス、アブラゼミ、ミンミンゼミ、シオカラトンボのオス、メス、カマキリのぬけがらと7点だけの標本ですが本人は大喜びで、新学期にハリキッて持っていきました。ところがクラスの反応は、あまり乱暴に扱うと足や尾が欠けるのを気にする息子のことをば無視してよけいにさわりまわったり、「死体や、死体や、殺したんや」と言われてひどく傷ついていました。…「6年生もクラスの子もみんな死体や言う！」と泣いて帰ってきました。本人もとてもくやしい思いをしたし、私もなんとも言えない思いなのですが、小2の子供達に何と言えましょうでも理解してもらえるのか分かりません。（木村，1997b: 8）

この投稿には、そのすぐ下に協会理事の木村義志からこの母親へ向けた長文の応答が添えられて

いる。そこではまず、

少なくともこの手紙に書かれていた先生と生徒は、虫も殺さぬほど自然から遠ざかっていて、昆虫のことをあまりご存じないようです。虫を飼って虫について学ぶということは、その死を学び、将来それをどう生かしていくかということです。(木村, 1997b: 8-9)

と昆虫の死を体験することの重要性を述べる。そのうえで、

こういっては何ですが、そこらの小学生や教師に、ご子息の知識や情熱を正しく評価せよというのちょっと気の毒な気がします。彼らは昆虫や標本のことなど何も知らないのですから。クラスの友達や先生とは、昆虫以外のことでしっかりつき合えばいいのです。…幼いときに昆虫の魅力に目覚める子は、自らの力で自然科学の扉を開いた「選ばれし御子」なのであります。これから大いに頑張ってください。私どもはできるだけ応援させていただくつもりです。(木村, 1997b: 9-10)

ニュースレターは、木村による母親向けの返信だけでなく、学校でからかわれた子どもへの手紙もつづけて掲載している。そこで木村はこう励ます。

こんなことでへこたれず、これからもしっかり昆虫の研究をつづけてくれたまえ。

君はまだ会ったことはないだろうけど、全国には君のような小学生の昆虫研究家がたくさんいる。そしてみんなすごががんばっているよ。そんな中にはおとなの学者もびっくりするような発見をしたり、博物館に負けないうらいきれいな標本を作った子もいるんだ。

今、昆虫博士としてかつやくしている人には、子供のころから虫が好きだった人が多いから、みんな子供の研究家を応援している。みんな仲間だ。(木村, 1997b: 10)

昆虫の魅力に目覚めた者は「選ばれた御子」なのだという、この木村の語り口はけっして例外的なものではない。すでに1970年代から、昆虫愛好家は誰よりも虫のことを知っている、しかし同時に大多数には理解されない存在なのだという、自負心と疎外感がない交ぜになった感情が語られることは多々あった(渡邊, 2019: 176-7)。

次号のニュースレターにおいては、このやり取りへさらなる励ましの手紙が寄せられる一方、木村の返信への疑義も寄せられた。小学校6年生の息子をもつ母親からのコメントである。

知識のない人達より、自分は一步も二歩も上にいるんだ。だから、そういう人達とは昆虫以外の事で付き合えばいいんだ。という片寄った考えで大人になる方が将来が狭まってしまう様に感じられます。

確かに、幼な心にあの様な暴言は、非常に傷つくでしょうが、そこで味方のいっぱいいる方にだけ向かせてしまっていていいものなのでしょうか。

…日本を代表する昆虫の専門家達が味方だから頑張れだけでは済ませてはいけない様に思います。

たまたまこういう試練にあたっただから、これを良い機会に生き物とはどういう物なのか、標本にはどんな意義があるのかなど、もう少しわかりやすく解説してあげても良い様に思いました。

そうする事により、自分なりに知恵を働かせて、昆虫に興味のない人達とも共存していく道を探りだしていけるのではないのでしょうか。(日本昆虫協会・事務局, 1998: 6)

この投稿はただ掲載されただけで、これ以上のやり取りはなかった。ここではひとりの小学生への対応のみならず、継承すべき精神にまつわる重要な問題が提起されている。同好の者のみへ関係を閉ざしていく精神的態度への疑義である。「選ばれし御子」という語が示すように、昆虫採集の優位性の主張は人間としての優位性の主張につながるのか、他者との交流をあきらめる態度に繋がらざるを得ないのかと彼女は問うている。

こうして継承すべき精神のあり方も論争的なものになる。ただし、この問題はこれ以上深く探求されたわけではない。さらに考えると、昆虫採集の優位性を強調するとすれば、それとアサギマダラのマーキングや昆虫大賞における絵画との関係はどうかといった問いも論理的にはあり得る。この点については問題提起があったわけではなく、整合性の処理もなされなかった。概して日本昆虫協会のコアメンバーは、昆虫採集に反対する動きには強く反応したが、それ以外の思想信条に単一性を求めることはしなかった。

5. 結果と考察

本稿の目的は、日本昆虫協会がどのように昆虫採集の継承をめざしたのかという疑問を検討することであった。とくに、昆虫採集を中心とする継承されるべき望ましい昆虫とのかかわり合い方を、どのようなものとして定義しようとしたのか、そこではどのような操作が行われていたのかを検討した。

検討の結果、明らかになったのは、第一に、子どもに継承させるべきものを作り出すために2つの操作があることである。まず、昆虫を採集し、標本を作るという実践を継承させるべき実践とする。これは前の世代が行ってきたことと同一のものとしてされ、コアとして設定される。そして、それになるべく子どもたちに行ってもらおうとする努力がなされる。ただし、その努力の中で、設定された継承されるべきものへ、初心者向けの採集会・標本づくり体験会など、自分たちがあまり経験してこなかった新たな要素が加えられる。すなわち、同一のものを支える補助的なものとして違いを積極的に導入して、それらを子どもたちに行ってもらおうとする。これを類似性の追求とよぼう。先行世代の実践との類似を追い求めているからである。

これに対して、標本づくりを必ずしも重視しない、あるいは採集ではなく昆虫の絵を描くのもよいという態度も生まれる。たとえば夏休みの自由研究大賞の創設がこれにあたる。つまり、継承されるべきものの範囲を積極的に広げていこうとするものである。これを包摂性の追求とよぼう。

継承されるべき実践そのものに様々な要素を包み込もうとしていくからである。こうした継承されるべきものの2つの切り出し方は並走する。単一解が必要とされているわけではない。

第二に、これら2つの操作を支えるのは、精神と実践の切り分けである。そこでは継承されるべき精神が抽出され、先行世代の自分たちが持っていた精神の継承こそ重大事であり目標であるという操作がなされる。特定の実践を行うことは特定の精神を継承するためだという、実践の精神化という操作である。これは類似性・包摂性双方の追求において重要である。実践における類似性の追求は、外形的な実践が継承されればよいのか、それでは継承自体の自己目的化ではないかとの疑義を生じる。その一方で、特定の精神のあり方の継承を第一とすれば、実践の許容範囲は広がり続けてしまう。そこで、他の実践と比較して昆虫を採集することの優位性を強調することが試みられる。ただし、継承されるとする特定の精神のあり方へも疑義が向けられることもある。

こうした操作によって、昆虫採集を自然とかわるのための手段として継承しようとする努力や、昆虫との関わり方のレパートリーを多様化しようとする努力が交錯しつつ形成されていた。本稿はその一端を検討したに過ぎない。今後は2000年代以降顕著になるインターネット空間における昆虫採集をめぐる試みの検討に加え、より広く日本の環境運動史・政策史の中に昆虫愛好家を位置づけていく作業が必要になる⁽⁸⁾。

注記：本稿の執筆にあたっては川上洋一氏より貴重な資料の提供や助言をいただいた。御礼申し上げる。むろん文責は筆者にある。

注

- (1) 保坂らは昆虫ツーリズムを、「虫体（生死に関わらない）を直接的に（昆虫生産物や映像などは含まない）扱った、特定の開催場所をもつ（参加するにはその場所へ行かなくてはならない）一般市民向けの鑑賞・体験イベント」と定義している（保坂ほか、2017: 58）。
- (2) この経緯については、小西正泰による回想が参考になる。初出が1992年の文章から引用しよう。

「あのいまわしい太平洋戦争が始まると、はじめのうちこそ『科学する心』をはぐくむため、小・中学生の昆虫採集は夏休みの格好の宿題として奨励されたが、敗色濃厚となるにしたがい、屈強の若者が捕虫網を振り回していると『非国民』呼ばわりされるようになり、昆虫熱も一時、水を差された。…1960年代に高度経済成長期に入ると、自然環境の破壊が急速に進み『かけがえのない地球』への危機感から、極端な自然保護派などにより、またまた昆虫採集は罪悪視されるようになる。そして、いい年をして網などをかついでいると、たちまち『自然破壊者』のレッテルを貼られてしまう。…このように、かつては『文部省推奨』の昆虫採集も、いまでは違法行為扱いされることが多くなった。これは興味ある社会史の一面ではなかろうか」(小西, 2007: 32-3)。

- (3) 80年代後半からは里山の変容が昆虫相にあたえる影響が主要論点に加わるようになった。川上(2017)を参照。
- (4) 主にチョウやガの翅を広げること。きれいに行うには展翅板などの専門の用具や、細心の注意・慣れを要する。
- (5) 1993年に昆虫採集を教育に用いることの是非を論じた論文においても次のように定義されている。「単に昆虫を捕って遊ぶという行為ではなく、昆虫を捕獲しかつ(程度の差はあれ)標本にして収集する行為」(松良, 1993: 56)。
- (6) 昆虫愛好家のあいだでは、たいていの場所で見ることができる種は「普通種」とよばれ、かなり珍しい種は「珍品」とよばれた。この区別によって愛好家たちが「珍品」を求めて競争を過熱させる傾向が70年代あたりから問題視されるようになった。むしろ「普通種」と「珍品」が指し示す種は変動する。
- (7) 代表的な採集地案内には、京浜昆虫同好会による『新しい昆虫採集 上・下』(1958年・1959年内田老鶴圃)および『新しい昆虫採集案内 I～III』(1971年・1971年・1973年内田老鶴圃新社)がある。これは日本全国の山野を採集記録やアクセスの仕方とともに紹介するものであった。採集に必要な装備のほか、前者においては山行や標本作成のテクニック、後者においてはドライブの仕方や写真撮影のテクニックについても詳しい。70年代にはすでにこのような採集案内は乱獲を促すものなのではないかという疑問符が付けられていた。

- (8) もう一点、本稿が持つ理論的な示唆としては、継承を違いから考えていくという可能性がある。日本昆虫協会が格闘したのは、急激に変化していく社会情勢や自然環境の中で、もはや同じことはできないがそれでも同じことをするにはどうすればよいかという問いであったと言ってもよい。類似性の探求、包摂性の探求、実践の精神化といういずれの操作も、確固とした継承されるべきコアが自明のものとして前提とされてなされるものではなかった。継承には違うはずのものを同じだとするという操作がなされているからこそ、継承は継承として成り立っているのかもしれない。これは変化が激しく、何一つ確かなものが想定できない近代における継承、という問題設定において継承を考えるものでは必ずしもない。なぜならこの問題設定では、少なくとも理論上は確固として同じものがあり得ることが前提とされるからである。その場合、あくまで同一なものの変化と持続の関係や動態を問う形になる。このときの焦点は、それでも変わらないものは何か、ということであったり、変化はどのように制御され得るのか、変わらないものを残すために何を変えるのかということであったりすることになる。そのような同じものの変化と持続、あるいは変わるもの・変わらないものを論じるという視点ではなく、違いの中から同一性を切り出す営みとして継承をさらに考えてみることもできるのだろう。

参考文献

- 水室俣, 1992, 「日本昆虫協会事務局様」『日昆協ニュースレター第4号』日本昆虫協会・事務局: 10.
- 保坂哲朗・栗本実咲・沼田真也, 2017, 「日本の昆虫文化と昆虫ツーリズム」『観光科学研究』10: 57-64.
- 金田正人, 1994, 「続「昆虫採集是非論」に思う」『日昆協ニュースレター第18号』日本昆虫協会・事務局: 4.
- 河合正人, 1992, 「昆虫そのものへの関心を」『日昆協ニュースレター第6号』日本昆虫協会・事務局: 6-7.
- 川上洋一, 2017, 「キリシマミドリシジミが高尾山に飛ぶ日——分布の拡大と森林の変遷」『昆虫と自然』52(11): 30-2.
- 木村義志, 1997 a, 「我々が昆虫協会にお金を支払う理由」『日昆協ニュースレター第28・29号』日本昆虫協会・事務局: 20.
- , 1997 b, 「君には大勢の虫仲間がいるんだ

- よ！[前川知子さんへの返事]』『日昆協ニュースレター第32号』日本昆虫協会：8-10.
- 小岩屋敏，1991，「昆虫採集は本当にいけないことか」『ニュース・レター第1号』日本昆虫協会・事務局：3-5.
- 小西正泰，2007，『虫と人と本と』創森社.
- 松良俊明，1993，「『昆虫採集』の教育的意義についての一考察」『京都教育大学環境教育研究年報』1: 55-6.
- 三好利也，1994，「『採集の奨励』は逆効果」『日昆協ニュースレター第15号』日本昆虫協会・事務局：3.
- 日本昆虫協会，1991 a，「『日本昆虫協会』（略称「日昆協」，1991年4月10日設立）設立趣意書」日本昆虫協会.
- ，1991 b，「これまでに次のような採集・観察会が行われ，大変好評でした（日本昆虫協会主催，東京近辺）」『ニュース・レター第1号』日本昆虫協会・事務局：10-1.
- ，1992，「各委員会・委員長の紹介」『ニュース・レター第3号』日本昆虫協会・事務局：10-1.
- ，1993 a，「第二回日本昆虫協会総会報告」『日昆協ニュースレター第9号』日本昆虫協会・事務局：2-8.
- ，1993 b，「1993年度第2回役員会報告（上）」『日昆協ニュースレター第13号』日本昆虫協会・事務局：9-15.
- ，1995，「1994年度日本昆虫協会総会の報告（下）」『日昆協ニュースレター第20号』日本昆虫協会・事務局：2-11.
- ，1996，「1995年度総会の報告（中）」『日昆協ニュースレター第26号』日本昆虫協会・事務局：3-8.
- ，1997，「1995年度総会の報告（下の2）質疑応答」『日昆協ニュースレター第28・29号』日本昆虫協会・事務局：8-12.
- 日本昆虫協会・事務局，1992 a，「1991年度総会の基調報告」『ニュース・レター第3号』日本昆虫協会・事務局：2-3.
- ，1992 b，「一年半を振り返って」『日昆協ニュースレター第7号』日本昆虫協会・事務局：12.
- ，1993，「第3回 夏休み昆虫研究大賞作品大募集」『日昆協ニュースレター第10号』日本昆虫協会・事務局：15.
- ，1995，「事務局より」『日昆協ニュースレター第21・22号』日本昆虫協会・事務局：3-4.
- ，1998，「読者からのお便り」『日昆協ニュースレター第33・34号』日本昆虫協会・事務局：2-9.
- 日本自然保護協会編，2002，『自然保護 NGO 半世紀のあゆみ——日本自然保護協会 50 年誌 上 1952-1982』平凡社.
- ，2006，『自然観察ハンドブック』平凡社.
- 奥田欣之助，1995，「モンキアゲハの採集会に思う」『日昆協ニュースレター第21・22号』日本昆虫協会・事務局：3.
- 奥本大三郎，1997，「1996年度会員総会の報告」『日昆協ニュースレター第30号』日本昆虫協会・事務局：8-9.
- 高橋真弓，1996，「昆虫同好会の現状と課題」『日昆協ニュースレター第25号』日本昆虫協会・事務局：12.
- 田中昭子，1992，「『昆虫採集』と『生命の尊重』」『日昆協ニュースレター第5号』日本昆虫協会・事務局：8-10.
- 田中洋，1994，「夏の王者カブトムシ」『日昆協ニュースレター第18号』日本昆虫協会・事務局：9.
- 渡邊悟史，2019，「1970年代の『月刊むし』における昆虫採集擁護論の特徴と課題：昆虫が減少する現代の文脈において」『環境社会学研究』vol.25: 171-85.

Trial and Error in Preserving and
Transmitting the Tradition of Insect Collecting:
A Look at the Early Activities of the Japan Insect Association

Satoshi Watanabe

This study examines the trial-and-error efforts of the Japan Insect Association to preserve and transmit the tradition of insect collecting. When the Japan Insect Association was formed in the 1990s, a major pillar of its mission was to ensure the transmission of insect collecting to future generations. This study focuses on how the organization defined “insect collecting” and desirable ways of interacting with insects, how it tried to conserve the practice for future generations, and what kind of strategies the Association employed to promote its objectives. From a review of all the newsletters of the Japan Insect Association, from the first issue in 1991 to issue 41 in 1999, two distinct findings emerged: (1) that to create something to be passed on to the next generation, the Association pursued two clear objectives, which could be called “similarity” and “inclusion”; and (2) that to support these two pursuits, there was an observable “spiritualization” of the practice of insect collecting. These strategies constituted efforts to conserve and transmit insect collecting as a means of engaging with nature, and to diversify the repertoire of ways of interacting with insects.